

---

# 鏡は見ないで

春野天使

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鏡は見ないで

### 【Nコード】

N8307A

### 【作者名】

春野天使

### 【あらすじ】

中学一年の百合華達は、放課後の教室で『こっくりさん』をする。途中、『こっくりさん』の様子がおかしくなり、恐くなった未梨は十円玉から指を離してしまう。霊感の強い絵美は、未梨の異変に気付く……。

## (前書き)

真夏のホラーフェア小説参加作品です。「夏ホラー」で検索すると他の先生方の作品も読めます。

この作品はある方の実話を元に書いたノンフィクションです。登場人物名、その他細かい部分はフィクションです。

中学一年の百合華は、放課後の教室で仲良しの未梨と絵美と、机を挟んで雑談していた。教室には、三人の他に祐介と徹しか残っていない。二人は、教室の隅で鞆を抱えたまま立ち話をしていた。

「でね、この前言ってたもの用意して来ちゃった」  
百合華は悪戯っぽく笑うと、鞆の中から一枚の紙を取りだして机に広げる。

「あつ、これってもしかしたら……」

未梨は一瞬顔を強ばらせ、じっと紙を見つめる。ひらがなで書かれた五十音の文字と数字。隅の方には鳥居のマークが描かれている。

「……こっくりさん？」

絵美は声を落として呟く。

「ピンポン！ 一度やってみたかったんだ」

百合華は明るく言うと、財布から十円玉を取り出す。

「昨日、ネットでやり方調べてみたの」

「やめた方がいいよ。『こっくりさん』は遊び半分でやっちゃいけない」

「そう言うことも注意書きで書いてあったわ。私、遊び半分じゃないもん。真剣だから」

心配そうな顔をする絵美に、百合華は笑って答える。

「ちよつと怖そうだね。でも、私もちよつとやってみたいな」

未梨は、百合華と絵美の顔を交互に見ながら言った。

「……私はやだ。もし、こっくりさんが帰らなかつたらどうするのよ。誰かに取り憑いちゃうかもしれないじゃない」

「そんなことないって、ちゃんと帰ってもらってから大丈夫よ」

「いや」

絵美は首を横に振る。

「もー、絵美は恐がりなんだから！」

「あ……絵美って靈感強いもんね。この前もお祖母ちゃんの幽霊見たとか……」

未梨は恐る恐る絵美を見る。

「えー！ マジ？ そっちの方が怖いじゃん」

「とにかく、私はやらないから」

絵美は席を立って帰ろうとする。

「待ってよ。見るだけでもいいじゃない。付き合いなさいよ」

百合華は、強引に絵美の腕を掴んで座らせる。

「あ、でも二人じゃ人数少ないね」

百合華は教室を見回し、教室の隅に祐介と徹の姿を見つける。二人は喋りながら、教室を出ていこうとしていた。

「あつ、ちよつと！ 祐介！ 待ちなさい！」

百合華は祐介を大声で呼ぶ。祐介とは幼なじみで、気の強い百合華は昔から祐介を子分のように扱っていた。

「何だよ」

祐介は鬱陶しそうに百合華の方を見る。

「今から、『こつくりさん』やるの。あんたと徹君も参加してよ」

「『こつくりさん』？ 面白そうだな」

興味をひかれた徹が、祐介の代わりに答えた。

「でしょ？ 色んなことを『コツクリさん』から聞けるかもよ」

百合華は、フフフと意味ありげに笑う。

「けど、『こつくりさん』ってなんかやばくない？」

祐介は少し躊躇する。

「大丈夫だって！ 私を信じなさい」

「ちゃんとやれば、全然恐くないと思うよ……」

未梨が、徹を意識して見ながら言った。百合華はその様子を横目で見て、ニコリと笑う。

「未梨、徹君と接近出来るチャンスだね」

百合華は未梨の耳元で囁いた。親友の未梨が徹に片思いなのは百合華も知っている。

「ホントかよ……」

祐介は気乗りしなかったが、徹はサツサと女の子達の席に歩いて行き、仕方なく祐介も仲間に加わった。

「……どうなっても知らないわよ」

四人が集まると、絵美は席を立って少し離れた窓側の席に移動した。

「祐介、窓開けてきて」

百合華は、さっそく祐介に命令する。

「窓？」

「北側の窓を開けなきゃいけないの。この教室はちょうど北側だからあっちの窓でいいはずよ」

「へえ〜 何のために？」

席を立ち窓を開けた祐介は聞く。

「もちろん、『こつくりさん』が入ってくるためじゃない」

百合華は笑って言うが、祐介は少し不安げな顔をする。

「『こつくりさん』って何もんだよ……」

「いいから、席に着いて。始めましょう」

絵美は頬杖をつき、フーとため息をもらして窓の外を見る。日暮れにはまだ時間があり、空は晴れ渡っている。だが、絵美は不安だった。さつきから胸騒ぎのような、嫌な気分を感じていた。

「……本当に知らないから……」

絵美は低く呟く。

百合華と未梨と祐介と徹は、紙の上に置いた十円玉の上に人差し指を軽く乗せた。

百合華は深呼吸すると、十円玉の方を見ながら語りかける。

「こつくりさん、こつくりさん、いらっしやいましたら、鳥居のところまでお進み下さい」

四人はじつと十円玉を見つめ、動くのを待つ。しかし、十円玉は動かなかった。

「こつくりさん、こつくりさん、鳥居のところまでお進み下さい」「百合華はもう一度繰り返し返す。五人以外誰もいない静かな教室。コチコチという壁時計の音だけが小さく聞こえてくる。

「こつくりさん、こつくりさん」  
百合華がもう一度語りかけた時、教室の窓からヒューと風が吹いてきた。窓から入り込んだ風は、四人の頬を撫で髪をなびかせた。それと同時に十円玉がスツと動き始める。

四人が息を呑んで見つめる中、十円玉はススツと鳥居のマーク目指して進み、鳥居の上でピタツと止まった。

百合華は緊張気味に皆の顔を見回しながら、質問を始める。

「こつくりさん、こつくりさん、質問に答えてください。構わないなら『はい』のところに進み下さい」

十円玉は、間をおかずに『はい』の文字にスツと進む。

「では、質問します。岡部の髪はカツラですか？」

岡部とは担任の教師のことだった。まだ三十代だが、前髪のあたりが不自然で、カツラだという噂が流れていた。

「おい」

喋ろうとした祐介の足を百合華はけ飛ばし、シツと小声で注意する。十円玉は迷うことなく、『はい』のところをくると回って止まる。四人は必死で笑いをこらえながらその様子を見ていた。

「ありがとうございます。では、次の質問です」

百合華は、チラリと徹に視線をやり続ける。

「徹君には好きな子がいますか？」

えっ？ という顔をする徹の目の前で、十円玉は素早く『はい』の元に行く。

「その子の名前の一番最初の文字を教えてください」

「……あ」

未梨は不安気な眼差しで百合華を見つめる。

今度は、十円玉はなかなか進まない。考えるように紙の空欄をくると回っている。

「こつくりさん、徹の好きな子はたくさんいますか？」

進まない十円玉を見て、百合華の代わりに祐介が質問した。すると、十円玉はスツと『はい』の方に進んでいった。クスクスと笑う祐介。徹はもう片方の手で頭をかいた。

百合華と未梨は複雑な様子で顔を見合わせる。

と、その時、窓から強い風が吹き付けてきた。風は、『こつくりさん』の紙をパリりとめくり、皆は慌てて片方の手で紙を押さえた。「あ……………」

絵美は窓から空を見上げる。さっきまで晴れていた空に、いつの間にか黒い雲が立ちこめてきている。雲は煙のようにもくもくと広がっていった。一瞬にして、教室の中は夜のように暗くなる。

「キヤツ」

十円玉の上に指を置いていた未梨は、小さく悲鳴を上げる。紙の上を滑っていた十円玉が、僅かに宙に浮いたのだった。そして、十円玉は強い力で紙の上をスースー移動し始める。

「未梨！ 十円から指を離しちゃダメよ！」

指を離そうとした未梨を、百合華は怒鳴りつける。

「でも、十円が……………」

未梨は泣きそうな顔をする。その間も、十円玉は紙の上をクルクルとでたらめに回り続けた。そして、五十音の文字の上を滅茶苦茶になぞっていく。

「私、もうダメ！」

耐えきれなくなった未梨は、十円玉の上からとうとう指を離してしまった。その瞬間、四人の指にガクンという衝撃を感じ、十円玉はピタッと動きを止めた。

それと同時に、吹くはずのない強い風が教室から巻き上がり、『こつくりさん』の紙を吹き飛ばすと教室の窓をガタガタと揺らせた。「……………」

皆は固唾を呑んで、その様子を見守る。ようやく嵐のような強い風が去った後、黒い雲は嘘のようにひいていった。空には何事もなかったかのように青空が広がる。

未梨は、恐怖のあまりシクシクと泣き出した。

「……な、なんだよ、今の」

祐介も青い顔をしている。

「どうしよう……」『こっくりさん』をちゃんと帰らせなかったよ

流石の百合華も心配になってきた。

「帰らなかつたら、どうなるんだよ？」

徹は百合華に聞く。

「それは、私もよく分からない……ねえ、絵美」

百合華は窓辺に座っていた絵美に泣きつく。

「だから、やめなさいって言ったのに！」

絵美はムツとした顔で四人を見る。と、絵美の顔が凍てついたように固まった。絵美はじっと未梨を見つめている。

「未梨……」

「……え？」

涙を手で拭いながら、未梨が顔を上げる。

「……あのね」

絵美はゴクリと唾を飲み込む。

「今日は絶対、鏡を見ちゃダメよ……」

「え？ 鏡？ 何故？」

目を赤くした未梨は、きよとんとした顔で絵美を見る。

「だって」

目を大きく見開き、青ざめた顔をした絵美は、ガタンと椅子から立ち上がる。

「とにかく、今日だけは絶対見ないで！」

絵美はそう言つと、まっしぐらに教室から走って出ていった。

「え？ どういうこと？」

絵美の後姿を見ながら、未梨は途方にくれる。

「私、何か変？」

「うっん、何ともないよ」

百合華は答える。未梨はいつもの未梨で特に変わった様子はない。

「あいつ、また見たんじゃねえの？」

「えっ？」

未梨は怯えた目をする。

「だから」

「馬鹿！」

百合華は祐介を睨み付けると、彼の足をけ飛ばした。

「テッ……」

祐介は足をさすりながら、言おうとした言葉を飲み込んだ。

「気にすることないよ、未梨。でも、ま……今日は鏡見ない方がいいかもね」

百合華は不安を感じながらも、笑って言った。

靈感の強い絵美のこと。本当に何か怖い物を見たのかもしれない。未梨はそう思い、絵美に言われたとおり、翌日まで鏡を見ないようにした。帰れなかった『こっくりさん』に取り憑かれてしまったかもしれないのだから……。自分でも気になっていたが、なるべく考えないようにした。

部屋の鏡はもちろん、家中の鏡も見なかった。お風呂にも入らず、髪もとかず、歯も磨かないで、サッサとベッドに入った。

良かった。これで明日もう一度絵美に見てもらえば良いわ。

未梨は安心して目を閉じた。

真夜中過ぎ、部屋の窓がガタガタ言う音を聞いて、未梨はふと目を覚ました。その夜は風もない静かな夜。二階の窓が揺れるはずはない。

不思議に思っていると、また窓ガラスがガタガタと鳴った。

特に恐怖心はなく、その音は普通に風が窓を揺らせているような感じの音だった。それでも、少し気になった未梨は、部屋の明かり

をつけ窓のカーテンをサツと開けた。

「ギャー!!!」

未梨は凄まじい悲鳴を上げる。窓には顔が映っていた。窓ガラスが鏡のように、鮮明に未梨の姿を映している。顔はじつと未梨を見つめ返す。それは、いつもの未梨の顔ではない。ガラスの中から不敵な笑みを浮かべたその目が光る。その顔の正体は　　！　　完

(後書き)

いかがだったでしょうか？

実際のお話では、「鏡を見ないで」と言われた子は鏡を見ずに過ごして無事だったようです…(^^;)もし、見ていたら何が映っていたか分からないんで、ああいう終わり方にしました。『こっくりさん』は恐いです。私は一度もやったことはありません。皆さんも興味本位で遊ばないようにして下さいね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8307a/>

---

鏡は見ないで

2010年10月8日15時59分発行